

### 2022年度のおわりに

ボランティアコーディネーター 広瀬 かおり

立教大学ボランティアセンターに、コーディネーターとして着任して、3年目が終わろうとしていますが、コロナ禍の制限により、何もできない日々が続いた時期が終わり、ようやく機能が再開して、センターに学生が集い向かい合って話すことができるようになった状況に、まずは感謝したいと思います。

コロナ禍で人間関係がうまく築けずに危機感を感じ、昨年度まではオンラインイベントに繋がりを求めて参加してきた学生が、「選べるならば対面で！」と、笑顔で積極的に人と会う機会を楽しんでいる姿は、そばで見ていて本当にうれしいものです。それぞれの学生が「会えなかったからこそ感じるようになった対面活動の価値」を十分過ぎるくらいに経験し、そのことが新しい原動力となり、にわかに活気づいています。

このようなWithコロナの状況下で、「繋がりたい、何かしたい」と強く思う学生が勢いよく動き出した今年度は、より学生の自主性をバックアップしていくという方向の支援に力を入れてきました。

例えば、大きなものでは、2009年から毎年開催してきたバリアフリー映画上映会を、今年度は「バリアフリープロジェクト」として新しく形を変えました。公募で集まった16名が、社会の中で人々を分断する「バリア」とは何かを考え、自由な発想と行動力を活かして、各チームでその解消を目指すというもので、ボランティアセンターのスタッフは、試行錯誤しながら頑張る学生を応援してきました。8月初めのキックオフミーティングに始まり、企画案の内容を何度も書き直したり、進めてみても、外部の方との連携がうまくいかなかったりを繰り返しながら、その後約半年間の過程で、学生メンバーは、バリアに関する意識ももちろんですが、企画実施のプロセス、人と繋がるということ、対面活動の喜びも大変さも、この活動に関わることで大いに学び、社会的に広い視野を持てるように成長したと感じています。

実は、今年度、バリアフリープロジェクトを始めるにあたり、学生の立場をより深く理解できるように、そして自身の学びのために、私自身も仕事以外のプライベートで、社会課題にアクションを起こすプロジェクトに参加していました。バックグラウンドの違う大人たちがチームとなり、参加者自らが、アクションや社会調査を企画し実行に移していくもので、チームごとに社会課題解決のためのアクションを行うという内容は、そのプロセスも期間も、バリアフリープロジェクトの学生が行っていることと、そっくりの流れでした。帰宅後や休日の時間で試行錯誤しながら進めていましたが、大人同士でも、人と人とは何かを協力して物事を行う時に生じる壁に何度もぶつかり、その度に、いつも学業の合間に同じように課題に直面しながら進めている学生の姿と重なり、社会人と学生の違いはあれど、人と接する時、共に何かを行う時に大切な普遍的なものに触れながら過ごす日々となりました。

時には涙を滲ませながらも、何とか自分たちの考えることをカタチにしたいと繰り返し相談に来る学生たちの想いをしっかり受け止めながら、今年度一緒に過ごした時間の中で気づいたことを大切に、心から寄り添い可能性を引き出すことのできるような支援を行っていきたいと思う1年となりました。

ボランティアセンターに来る学生たちが、「やっぱり、人と繋がることはいいですね!」「やっぱり、対面はいいですね!」と満面の笑みで話しているように、今後も、人と人との出会い交わる場で生まれる感動を伝えていくことができたらと考えています。

## コロナ禍を経て変化していくボランティア活動への関心とニーズ

－2022年度ボランティア相談記録の統計から－

ボランティアコーディネーター 齋藤 元気

本学では、COVID-19の感染拡大の影響により、正課外活動に対する制限が設定されていました。これにより、オンライン授業も多かった2021年度までは、ボランティアプログラムの実施はおろかボランティア情報の紹介もできず、学生はボランティア活動を通じた学びの機会を得ることが難しい状況が続きました。2022年度からはようやく本格的に正課外活動が再開され、ボランティアセンター（以下、ボラセン）によるボランティア支援業務も再開。それに合わせて多くの学生がボランティア相談に訪れましたが、コロナ禍の影響はボランティア相談の内容にも如実に表れており、コロナ前とのニーズの変化が見えたように思います。

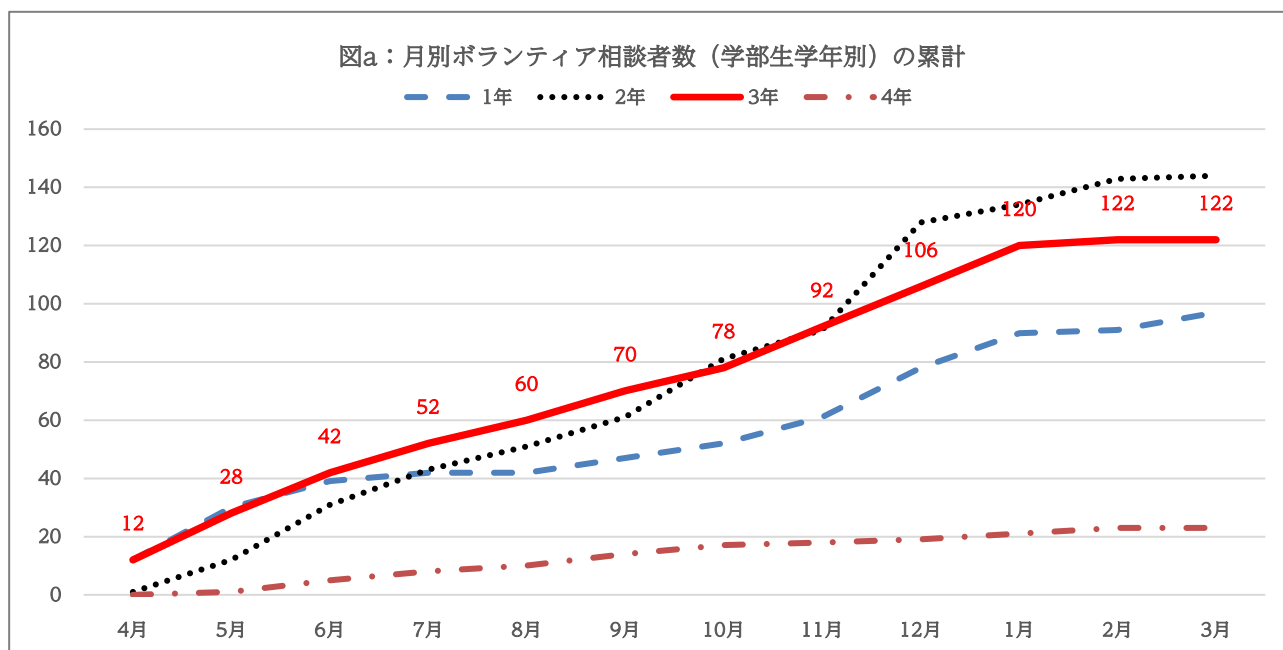
ここでは、学生の関心やニーズをより詳しく把握できるように統計方法をリニューアルした「ボランティア相談記録の統計」から、今年度のボランティア相談実態とそれを踏まえたボラセンの取組みについて振り返りながら考えを深めていきたいと思います。

図aは、2022年度（集計期間：2022年4月18日～2023年3月16日）ボランティア相談記録の統計から抽出した「月別ボランティア相談者数（学部生学年別）の累計」を表したグラフです。

特に「3年生」の相談者数を見てみると、4～11月における累計人数が他学年を抑えてほとんど最多を記録しています。例年は、ボランティアサークルを探したり、ボランティア活動を始めようとする1年生の割合が大きくなりますが、なぜ3年生の割合がここまで大きくなったのでしょうか。

そこには、コロナ禍の影響が大きく関わっていると考えています。COVID-19の感染拡大が始まったのは2020年の春ですが、同年4月に入学した学生がまさに今の3年生でした。そのため、入学後は学生生活の全てがコロナ禍の影響で以前と全く異なる状況になり、そのまま大学生活の半分を終えました。これが3年生の“焦り”につながったのかもしれない。

ボランティア相談票の記録を見ると、「今までに経験したことのないことをやってみたい」という声が多くあった他、就職活動を控え、「公務員予備校の先生にボランティア経験は大学生のうちしておくべきだと言われた」「いくつかの職種で迷っており、いろいろな活動を通して自分に合うものを見極めたい」など、“学生時代に力を入れたこと”や“自分の方向性を見定めるための機会”がないことに不安を感じる学生も多くなりました。



（集計期間：2022.04.18～2023.03.19／n=386 ※学部生）

さらに、そのような学生の多くは、「短期（1～2日間）で参加できる活動」を求める傾向があり、同時に、「3年生で始められるのか、やったことがないので不安がある」「友達と一緒になら勇気が出る」などの不安も口にしていました。

「すぐにでも経験が欲しいという焦り」と「経験のないことに挑戦する不安」が同居したこの想いが、コロナ禍を経た大学生において特徴的なニーズであると考えています。

そのようなニーズをもつ学生に対して、ボラセンでは「1 dayボランティア」の機会を提供してきました。この取組みの軸に置いたのは、「1日から参加できること」「立教生で構成されたチームで参加できること」「ボランティアコーディネーターが同行すること」です。

「1日から参加できること」は、もちろん「短期で行える活動」というニーズに対して設けた軸ですが、学生は短期であればどんな活動でも良いと考えている訳ではありません。コロナ禍で盛んに行われていたオンラインボランティアの多くは、「本来短期では行えないが、その一部を切り出し、学生の学びのために設定した」ものが多く、話を聞く・グループワークで意見交換するなどの座学の研修に近い機会となっていました。

しかし、ここで学生が求めているのは、現場での身体性を伴う体験的な学びです。そこで、ボラセンでは、ボランティア活動ならではの魅力を味わえるように、「東京都障害者スポーツ大会（陸上競技）」や「東京マラソン」といったスポーツボランティアに焦点を当てて機会を設定しました。スポーツの大会は一年に一度開催されるものが多いため、そもそも短期の活動が大半です。もちろん役割にもよりますが、一日の中で大会全体の運営に関わる様々な活動を経験できるため、学生にとっての気づきや学びも多くなります。

継続的に取り組むことで学びが深まるものもありますが、短期だから学びが少ないということでもありません。むしろ短期だからこそ学びのあるような活動を創っていくことがボラセンに求められていたことだったように感じています。

また、「立教生で構成されたチームで参加できること」「ボランティアコーディネーターが同行すること」は、ボランティア活動に参加するうえでの不安をできる限りなく減らし、ハードルを下げるために設定した軸ですが、これが学生に対し、大きな影響を与えたように思います。

実際に「1 dayボランティア」を実施してみると、参加者の大半が「初めてボランティア活動に参加する」という学生でしたが、最初は不安を口にしていた学生も活動を通して次第に積極的に動けるようになり、活動終了後の振り返りでは、楽しさや自信を感じさせる言葉を述べていました。

参加者はこれをきっかけに、継続的な取り組みである「バリアフリープロジェクト」や「海外ワークキャンプ」への参加、次の1 dayボランティアでリーダーとして活動するなど、さらに活動の幅を広げたり、参画度を高めたりし、様々なフィールドで活躍しました。驚くほどのスピードで学生たちがステップアップする様子を目の当たりにしたことで、「チーム（集団）」で得た自信が「個人」での活動を後押しするという一連の流れが価値をもっていたこと、何より学生が求めていたのは自分の新たな行動を後押しするような経験と自信だったことが分かりました。

もちろんこのようなステップアップの様子はコロナ禍において特別なことではありません。しかし、ボランティア活動を通じた学びや自身の成長・自信の獲得といったすぐに成果や変化が得られるものでないにも関わらず、学生はそれまでよりも圧倒的に短い時間の中でこれらを求めていたこと、それこそがコロナ禍の特徴として示されるのではないかと考えています。

今年度の3年生に見られたような“焦り”は、次第に薄らいでいくかもしれません。ボランティア活動に関する学生のニーズもきっと変化するでしょう。そのような変化をおもしろがること、学生の想いを受け止め、それを実現していくことを大事にしながら、次年度も立教大学ならではのボランティアコーディネーションを実践していきたいと思います。